公益財団法人サントリー芸術財団 サントリー美術館 107-8643 東京都港区赤坂 9-7-4 東京ミッドタウンガーデンサイド Tel: 03-3479-8604 Fax: 03-3479-8644

№. sma0065
（2023.10.26）

サントリー美術館
「四百年遠忌記念特別展　大名茶人　織田有楽斎」開催

会期：２０２４年1月３１日（水）～3月２４日（日）

織田有楽斎坐像　一軀
江戸時代　１７世紀
正伝永源院　【通期展示】

サントリー美術館（東京・六本木／館長：鳥井信吾）は、２０２４年1月３１日（水）から3月２４日（日）まで「四百年遠忌記念特別展　大名茶人　織田有楽斎」を開催いたします。

有楽斎（うらくさい）こと織田長益（ながます）は天文１６年（１５４７）に織田信秀の子、織田信長の弟として生まれました。武将として活躍し、晩年には京都・建仁寺の塔頭「正伝院（しょうでんいん）」を再興、隠棲します。正伝院内に有楽斎が建てた茶室「如庵（じょあん）」は国宝に指定され、現在は愛知県犬山市の有楽苑内にあり、各地に如庵の写しが造られています。正伝院は明治時代に「正伝永源院（しょうでんえいげんいん）」と寺名を改め、いまに至るまで有楽斎ゆかりの貴重な文化財を伝えています。

しかし茶人・有楽斎として名高い一方、武士・長益には悲観的なイメージも伴います。天正１０年（１５８２）に起きた本能寺の変では、二条御所に籠る長益の主君・信忠（信長の長男）が自害したにもかかわらず、長益は御所を脱出したことから、京の人々には「逃げた（男）」と揶揄されました。さらにその後、信雄（信長の次男）に仕え、徳川家康と豊臣秀吉の講和を調整するなど存在感を示したものの、信雄が改易されると今度は秀吉の御伽衆（おとぎしゅう）に加わります。関ヶ原の戦いでは東軍として参戦し、戦後も豊臣家に仕えましたが、大坂夏の陣の前には家康の許可を得て主君から離れました。

信長、秀吉、家康の三天下人に仕えて時流を乗り切り、晩年を京で過ごした織田有楽斎の心中には、どのような思いがあったのでしょうか。本展覧会は、２０２１年に４００年遠忌を迎えた織田有楽斎という人物を、いま一度総合的に捉えなおそうと構成したものです。

《　展示構成　》※展覧会会場では、章と作品の順番が前後する場合があります。

第１章　織田長益の活躍と逸話ー“逃げた男”と呼んだのは誰か

国宝　短刀　無銘 貞宗（名物 寺沢貞宗）
一口　鎌倉時代末期～南北朝時代　１４世紀
文化庁　【展示期間：２／２８～３／２４】

織田長益は、天文１６年（１５４７）に織田信秀の十一男として生まれ、幼名を源吾（あるいは源吾郎）といいました。信長の１３歳下の弟にあたります。史料上、明確に姿をみせるのは天正期頃に遡り、各種の重要な儀礼に参加するなど、織田家の有力な武将としての長益の姿が知られます。

しかし天正１０年（１５８２）、明智光秀が謀反を起こし、本能寺において織田信長が自刃すると、彼の命運も激変することになりました。本能寺の変の時、長益は織田信忠と共に誠仁（さねひと）親王がいる二条御所に移り、ここで敵襲を受けました。親王を逃走させると信忠は自害しましたが、長益は城から脱出し、一説には安土を経て岐阜へ向かったと伝えられます。仕えている主君が自害し長益は難を逃れたことから、風聞書などのいくつかには、長益に“逃げた男”というレッテルを貼り、悪し様に評するものもありますが、果たしてそうでしょうか。本章ではこの点に立脚し、武将・織田長益の実像を、歴史資料を通して見つめなおします。

【主な出品作品】

・織田氏系譜　織田長清　一巻　江戸時代　１７世紀　正伝永源院

・信長公記　　巻十四・十五　十五冊のうち二冊　原本 太田牛一

江戸時代　１７世紀　陽明文庫

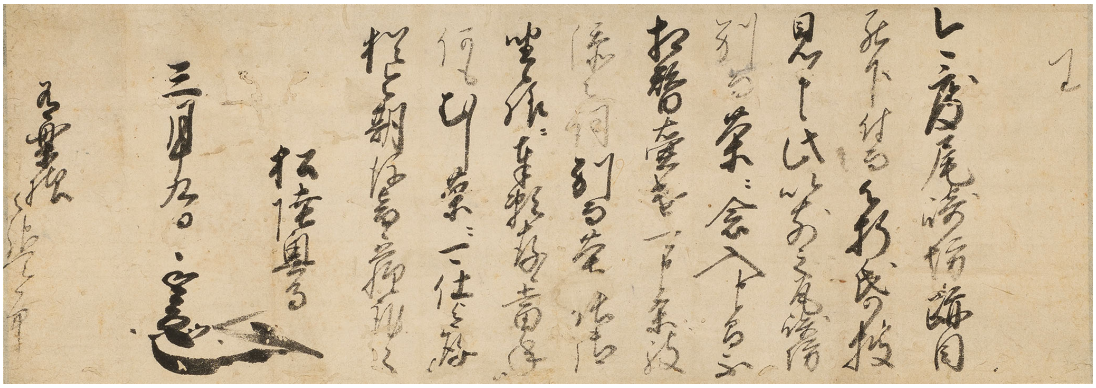
・義残後覚　　第五巻　愚軒　七冊のうち一冊

江戸時代　１７世紀　加賀市立中央図書館

・国宝　短刀　無銘 貞宗（名物 寺沢貞宗）　一口

鎌倉時代末期～南北朝時代　１４世紀　文化庁

第２章　有楽斎の交友関係



松平陸奥守書状　織田有楽斎宛

一幅　江戸時代　１７世紀

正伝永源院　【展示期間：１／３１～２／２６】

本能寺の変の後、長益は豊臣秀吉に仕え、摂津国島下郡味舌（しましもぐんました）（現在の大阪府摂津市内）に二千石の知行を与えられました。

秀吉の没後は徳川家康との関わりを深くし、関ヶ原の戦いでは石田三成の軍勢と戦をまじえて戦功をあげ、本領を安堵されただけでなく大和国山辺郡（現在の奈良県山辺郡）に知行地を与えられました。その後、大坂城に入り淀殿の叔父として淀殿・秀頼母子を補佐しましたが、常に徳川方へ配慮し、冬の陣においては豊臣・徳川の間で和議を結ぶよう説得しました。

戦国時代から江戸時代にかけての激動の時代、長益は有能な大名としての地歩を固めていきますが、夏の陣を前に京都・二条へ移り、また建仁寺塔頭・正伝院を再興し、ここを隠棲の地とします。もともと長益は利休も一目を置く茶人であり、法躰となり有楽斎と号した後も茶の湯に執心し、高僧や、古田織部、細川三斎、伊達政宗などの武将と結びながら茶会を開いていきます。これらの活動を示す書状はいまも正伝永源院に多く残り、茶人としての姿をよく示しています。本章では、有楽斎が残したこれらの書状を用いて、茶人としての彼の姿に光を当てます。

【主な出品作品】

・織田有楽斎坐像　一軀　江戸時代　１７世紀　正伝永源院
・松平陸奥守書状　織田有楽斎宛　一幅　江戸時代　１７世紀　正伝永源院
・細川忠興書状　織田有楽斎宛　一幅　江戸時代　１７世紀　大阪青山歴史文学博物館
・織田有楽斎書状　小出信濃守宛　一幅　江戸時代　１７世紀　正伝永源院
・織田有楽斎書状　土井大炊助宛（どいおおいのすけ）　一幅　江戸時代　１７世紀　正伝永源院

第３章　数寄者としての有楽斎

唐物文琳茶入　銘 玉垣
一口　南宋時代　１２～１３世紀
遠山記念館　【通期展示】

重要美術品　大井戸茶碗　有楽井戸
一口　朝鮮王朝時代　１６世紀
東京国立博物館　Image: TNM Image Archives　【通期展示】

有楽斎は茶の湯を介して大名、高僧、町衆との交流を深め、正伝院を終の住処とする頃にはすでに当時の茶の湯に重要な役割を果たすようになっていました。正伝院に茶室「如庵」を造営し、茶の湯三昧の日々を送った有楽斎が生前に集めた茶道具は、没後、孫の織田三五郎（長好（ながよし））が引き継ぎます。その後、これらは織田三五郎の遺言によって形見分けされ、残りは正伝院に寄進されました。残念ながらこれらの道具類の行方は、現在ではほとんど分かりません。

しかしながら今日各地に伝わる、かつて有楽斎が所持した、あるいは好んだと伝わる茶道具の名品から、数寄者としての有楽斎の姿に触れることができます。本章では有楽斎旧蔵の伝来を持つ茶道具、また「有楽好み」をうかがい知ることのできる品々をご紹介します。

【主な出品作品】

・織田三五郎遺品分配目録（正本）　一巻　慶安４年（１６５１）　正伝永源院
・有楽亭茶湯日記　一冊　江戸時代　文政３年（１８２０）写　今日庵文庫
・京都建仁寺正伝院茶室起絵図（おこしえず）　一点　江戸時代　１８世紀　東京国立博物館
・唐物文琳茶入　銘 玉垣　一口　南宋時代　１２～１３世紀　遠山記念館
・重要美術品　大井戸茶碗　有楽井戸　一口　朝鮮王朝時代　１６世紀　東京国立博物館
・重要文化財　緑釉四足壺　一口　平安時代　９世紀　慈照院

第４章　正伝永源院の寺宝

織田有楽斎像　狩野山楽筆　古澗慈稽賛
一幅　元和８年（１６２２）
正伝永源院　【展示期間：２／２８～３／２４】

蓮鷺図襖（部分）　十六面　狩野山楽
江戸時代　１７世紀
正伝永源院　【通期展示】

臨済宗建仁寺派の塔頭寺院である正伝永源院（京都市東山区）には、「正伝院」と「永源庵」の二つの歴史があります。

正伝院は鎌倉時代中期の文永年間（１２６４～１２７５）に開山し、永源庵は南北朝時代の正平年間（１３４６～１３７０）に開山したと伝わっています。

永源庵は当時の守護大名・細川頼有の帰依を受け、細川家の菩提寺となりました。一方、正伝院は元和年間（１６１５～１６２４）に織田有楽斎により再興され、隠居所と茶室「如庵」が建てられました。

その後、明治時代の神仏分離令や廃仏毀釈の影響で、堂宇のみを残して無住となっていた永源庵に正伝院が移ることとなり、永源庵が廃寺となります。その際、「永源」の名が残ることを願った細川侯爵家からの提案もあり、寺名は正伝永源院と改められました。

以上のような寺史を持つため、現在の正伝永源院に伝わる寺宝は、必ずしもすべてが織田有楽斎の生きた時代から所蔵されていたものと断定はできません。しかしながら《織田有楽斎像》をはじめとする絵画、墨蹟類、そして寺内に残る狩野山楽の襖絵など、貴重な寺宝が現在も脈々と継承されています。本章では有楽斎没後の正伝院に納められた寺宝を中心にご紹介します。

【主な出品作品】

・織田有楽斎像　狩野山楽筆　古澗慈稽賛（こかんじけい）　一幅
元和８年（１６２２）　正伝永源院

・旧正伝院客殿障壁画　禅宗祖師図　狩野山楽　四幅
江戸時代　１７世紀　個人蔵

・蓮鷺図襖（れんろずふすま）　狩野山楽　十六面　江戸時代　１７世紀　正伝永源院

・旧正伝院書院障壁画のうち山水図　長谷川等伯
六面　桃山時代　１６～１７世紀　名古屋鉄道株式会社

第５章　織田有楽斎と正伝永源院ーいま、そしてこれからー

黒楽「正傳院」字茶碗　伝 仁阿弥道八
二口　江戸時代　１９世紀
正伝永源院　【通期展示】

戦国の世に生を受け、織田家の血筋として時の政治に利用されながらも生き抜き、茶人として大成した有楽斎。現在に伝わる有楽斎の茶風は、有楽斎の格式張らずにそのままの姿で客をもてなす心を体現しているとも言われます。

本章では、正伝永源院と寺号を改めた後に納められた寺宝を中心にご紹介します。また、有楽斎が茶道の師として敬愛した武野紹鷗（たけのじょうおう）の供養塔の拓本や供養塔設置時の動画なども展示します。さらに、現在は愛知県犬山市の有楽苑に移築されている国宝の茶室「如庵」および重要文化財の「書院」の３次元計測データを、裸眼で立体視を可能とする“空間再現ディスプレイ”を使ってジオラマのように立体として表示する３Ｄ展示の設置も予定しています。

【主な出品作品】

・織田真紀　織田長清　八冊　享保２年（１７１７）　正伝永源院

・正傳集　織田輔宜写　九冊　明和８年（１７７１）写　正伝永源院

・貞要集　源義陳写　五冊　宝永７年（１７１０）成立、
享和２年（１８０２）写　正伝永源院

・黒楽「正傳院」字茶碗　伝 仁阿弥道八
二口　江戸時代　１９世紀　正伝永源院

【本展における展覧会関連プログラム】

◎講演会「有楽の茶の湯」

講師：筒井紘一氏（京都府立大学客員教授、茶道資料館顧問）

日時：２０２４年3月3日（日）１４時～１５時３０分

会場：６階ホール

料金：７００円（別途要入館料）

※当館ウェブサイトよりお申込みください。応募者多数の場合は抽選。

◎有楽流（正伝会）特別呈茶席

有楽流正伝会家元 真神啓仁氏（正伝永源院住職）による解説付きでお茶席を特別に体験いただけます。

日時：２０２４年2月１１日（日・祝）

１１時～、１３時～、１５時～（各回約１時間）

会場：６階茶室「玄鳥庵」

料金：3,５００円（お抹茶、お菓子代込み。別途要入館料）

※当館ウェブサイトにて１２月２０日（水）より申込受付開始（先着順）

詳細および最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。追加のプログラムを開催する場合もウェブサイトでご案内します。

四百年遠忌記念特別展　大名茶人　織田有楽斎

▼会　　期：２０２４年1月３１日（水）～3月２４日（日）
　　※作品保護のため、会期中展示替を行います。
▼主　　催：サントリー美術館、正伝永源院、読売新聞社
▼協　　賛：三井不動産、サントリーホールディングス
▼特別協力：織田有楽斎四百年遠忌実行委員会、株式会社エリジオン、
　　ＮＴＴコミュニケーションズ株式会社、ソニーマーケティング株式会社
▼会　　場：サントリー美術館
　　東京都港区赤坂９－７－４　東京ミッドタウン　ガレリア３階

交通機関（東京ミッドタウン［六本木］まで）
都営地下鉄大江戸線六本木駅出口８より直結
東京メトロ日比谷線六本木駅より地下通路にて直結
東京メトロ千代田線乃木坂駅出口３より徒歩約３分

【基本情報】
▼開館時間：１０時～１８時
※金・土および2月１１日（日・祝）、２２日（木）、3月１９日（火）は２０時まで開館
※いずれも入館は閉館の３０分前まで
▼休 館 日：火曜日（３月１９日は２０時まで開館）
▼入 館 料：
・当 日 券：一般1,６００円、大学・高校生1,０００円、中学生以下無料
※２０名様以上の団体は１００円割引
・前 売 券：一般1,４００円、大学・高校生８００円
※サントリー美術館受付、サントリー美術館公式オンラインチケット、ローソンチケット、セブンチケットにて取扱
※前売券の販売は１１月２０日（月）から1月３０日（火）まで
※サントリー美術館受付での販売は開館日のみ
▼割　　引：
・あとろ割：国立新美術館、森美術館の企画展チケット提示で１００円割引
※割引適用は一種類まで（他の割引との併用不可）

▼呈茶席（お抹茶と季節のお菓子）

日　時：２月１日（木）・１５日（木）・２９日（木）、
３月１４日（木）・２１日（木）
１２時、１３時、１４時、１５時にお点前を実施
（お点前の時間以外は入室不可）

会　場：６階茶室「玄鳥庵」　定員：各回１２名／１日４８名

呈茶券：１,０００円（別途要入館料）

※呈茶券は当日１０時より３階受付にて販売（予約不可、先着順で販売終了、お一人様２枚まで）

▼一般お問い合わせ ：０３－３４７９－８６００

▼美術館ウェブサイト：https://www.suntory.co.jp/sma/

▽プレスからのお問い合わせ：
サントリー美術館〔学芸〕安河内〔広報〕光田
https://www.suntory.co.jp/sma/info_press/

▽広報画像のお申込み：
「大名茶人　織田有楽斎」展広報事務局（共同ピーアール株式会社内）
〔担当〕安田、伊原、村上
ＴＥＬ　　：０３－６２６４－２０５９
Ｅ－ｍａｉｌ：urakusai-pr@kyodo-pr.co.jp

以　　上